



Cảm ơn! Xa Dinh Bang

(ありがとう! ティンバン村)



鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

青年海外協力隊鹿児島県OB会
鹿児島県青年海外協力隊を支援する会
財団法人鹿児島県国際交流協会

はじめに

鹿児島県青少年国際協力体験事業

実行委員会 会長

弓場 秋信

(鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 事務局長)

鹿児島県青少年国際協力体験事業は、平成3年にマレーシアに派遣以来16回を迎えた。この事業は、青少年を開発途上国に派遣し、そこの国づくり人づくりに貢献している青年海外協力隊員の活動を体験することで国際協力に対する理解を深めてもらうとともに、ホームステイや学校等での交流・異文化体験を通じて国際性豊かな青少年を育成することを目的に、青年海外協力隊鹿児島県OB会、鹿児島県青年海外協力隊を支援する会、財団法人鹿児島県国際交流協会の3者により構成された実行委員会で実施している。

今回の派遣国として、タイ、ベトナム、カンボジア、マレーシアの4カ国を候補に、治安・生活環境、鹿児島県出身協力隊員の有無、ホームステイ先の確保、過去の派遣実績等を総合的に判断してベトナムとした。ベトナムは、千年を超える中国支配、フランスの植民地化、南北分割、ベトナム戦争、と苦難の道を経て1976年南北統一社会主義国家が誕生した。そして1986年のドイモイ（刷新）政策導入後、経済が活性化し今日ではASEAN（東南アジア諸国連合）諸国の中で最も輝き、「中国プラスワン」としての期待も大きい。このベトナムを青少年が訪問する事で何かを感じ、学んでほしいとの思いもあった。

鹿児島市、南さつま市、枕崎市、霧島市、いちき串木野市、知覧町推薦の12名、企業の協賛を得ての実行委員会推薦5名は、ベトナム語、ベトナム事情、青年海外協力隊事業、地元鹿児島についての事前研修を経て平成19年7月22日～29日（7泊8日）ベトナムの首都ハノイ、バクニン省、バクザン省を訪問した。

17名の団員は滞在中に、国際協力機構JICA事務所でのベトナムにおける青年協力隊事業を含む国際協力についての学び、バクニン省ディンバン村での4泊のホームステイ、そして理学療法、村落開発、青少年活動の分野でバクザン省に派遣中の協力隊員の活動を体験した。

不安そうな出発時とは打って変り、自信に満ちた笑顔で鹿児島空港に降り立った団員から、「苛酷な環境の中で輝いている協力隊員に感動した」、「言葉より大切なものがある」、「地域や日本の事をもっと知りたい」、「将来の夢が見えてきた」などの言葉が飛び出した。

団員が始めて訪れたベトナムでの体験、感想が綴られたこの報告書「Cảm ơn! Xa Dinh Bang」が同世代をはじめ多くの皆様の目に触れることを希望しますとともに、事業実施に当たりご支援ご協力頂いた共催市町、協賛企業、国際協力機構JICA、ディンバン村をはじめとする関係者に心より感謝申し上げます。今後とも本事業へのご支援を賜ります様お願い申し上げます。

も く じ

はじめに

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会 会長 弓 場 秋 信

ごあいさつ	1
-------------	---

鹿児島県商工労働部観光交流局長 庭 田 清 和

第16回（平成19年度）鹿児島県青少年国際協力体験事業の概要.....	2
-------------------------------------	---

参加団員等名簿	3
---------------	---

スケジュール	4
--------------	---

地図	5
----------	---

体験事業ドキュメント	6
------------------	---

～事前研修から帰国報告会までの様子を絵日記風にまとめました～

団員が感じたこと	14
----------------	----

「青年海外協力隊の意義」	林	コナン
「青年海外協力隊への思い」	吉 田	朱 里
「私のこれから」	永 井	昌 美
「私のもうひとつの家族」	朝 田	清 子
「ベトナムでの7日間」	田 畑	美紗貴
「青年海外協力隊の姿を見て」	岩 田	圭 介
「私が得たこと、そして、路上のメッセージ」	濱 崎	瑠璃子
「ベトナムで学んだこと」	上 牧	美 穂
「私が感じたこと」	牟田原	美 貴
「初めて国際協力を体験して」	鈴 木	みや美
「ベトナムでの1週間を通して」	前 原	実 和
「ベトナムに行って成長した自分」	塗 木	ちあき
「ベトナムでの1週間」	叶	朝 子
「貴重な体験」	比 良	友 恵
「ベトナムでの1週間」	尾 下	望 美
「ベトナムに行って」	安 藤	伸 朗
「ベトナムの家族～触れ合った人々～」	壺 岐	ま い

団長報告	31
------------	----

「ベトナムで赤く燃えた」 西 村 良 二 (財)鹿児島県国際交流協会 専務理事)

同行者感想	32
-------------	----

「ベトナムが贈るとびきりの異文化体験」	山 下	美 穂
「Viet Nam」	門 野	誠
「自分を見つめなおす旅」	真 茅	貴 子
「若者に期待します！」	奥 村	佳 子
「国際協力体験事業ノススメ」	徳 永	健 一

新聞記事（南日本新聞，西日本新聞）	37
-------------------------	----

参考資料	41
------------	----

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の概要

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の実績

ごあいさつ

鹿児島県商工労働部観光交流局長

庭田 清和

平成19年度「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の御成功を心からお喜び申し上げます。

この体験事業は、鹿児島の青少年を開発途上国へ派遣し、それらの国の経済的・社会的発展に貢献している青年海外協力隊員の活動現場の体験や現地での協力活動を行うことで、国際協力に対する理解を深めるとともに、ホームステイや地元中高校生との交流などを通じて相互理解を深め、国際性豊かな人材を育成することを目的とした全国でも画期的な事業です。

また、県では、鹿児島を起点とした、国内はもちろんアジア諸国をはじめとする国外も含めた人的・物的交流を活発化し、「国際交流県かごしま」の形成を目指して様々な施策を積極的に推進していますが、本事業は、この趣旨とも合致する意義ある事業であると思っております。

さて、最近の国際情勢を見ますと、テロの発生や、領土や歴史認識を巡る外交問題、環境問題など様々な問題が発生しております。これらの問題を解決していくためには、それぞれの国や地域の文化・習慣・考え方などについて、相互に理解を深めていく必要があると考えます。

このような中で、今回の体験事業に参加された皆さんは、現地に溶け込んで活躍する青年海外協力隊員の姿を目の当たりにし、一緒に活動したり、ホームステイや地元の中高生との交流等を通じて現地の方々とふれあうことにより、国際協力や相互理解の必要性、重要性を痛感されたのではないかと思います。

このことは、帰国後に御報告をいただいた際の、「困難な中にも笑顔を絶やさず活動している隊員の姿に感動した。」「将来は国際協力の仕事に就きたい。」などの、心強い言葉に凝縮されているように思います。

この貴重な体験を糧として、身近なことから国際協力に取り組んでいただき、皆さんが世界に通用するたくましい若者に成長することを心から期待しております。

最後に、この事業を主催された鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会を構成する各団体及び実施に当たり御支援・御協力を賜りました国際協力機構並びに青年海外協力隊の皆様にご心から感謝を申し上げますとともに、関係者の皆様の今後ますますの御発展を祈念いたします。

第16回（平成19年度）鹿児島県青少年国際協力体験事業の概要

- 1 主催 鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会
※ 構成団体：青年海外協力隊鹿児島県OB会
鹿児島県青年海外協力隊を支援する会
(財)鹿児島県国際交流協会

- 2 共催 鹿児島市，枕崎市，いちき串木野市，霧島市，南さつま市，知覧町

- 3 後援 鹿児島県
鹿児島県教育委員会
独立行政法人国際協力機構 九州国際センター

- 4 協賛 (株)鹿児島銀行
鹿児島空港ビルディング(株)
鹿児島トヨタ自動車(株)
小正醸造(株)
薩摩酒造(株)
長島商事(株)
南国殖産(株)
(株)山形屋
弓場貿易(株)

- 5 事業の流れ 4月～5月 募集・団員決定
6月16日（土） 第1回事前研修
7月7日（土）～8日（日） 第2回事前研修
7月22日（日） 出発
7月29日（日） 帰国
8月2日（木） 表敬訪問
8月18日（土） 報告会
9～11月 報告書作成

参加団員等名簿

■ 団 員

	名 前	性別	学校名・学年	推薦市町等
1	はやし コナン 林 コナン	男	鹿児島県立 鶴丸高等学校 2年	鹿児島市
2	よし だ あか り 吉 田 朱 里	女	鹿児島市立 玉龍中学校 2年	鹿児島市
3	なが い まさ み 永 井 昌 美	女	私立 志學館中等部 3年	鹿児島市
4	あさ だ さや こ 朝 田 清 子	女	鹿児島県立 枕崎高等学校 1年	枕 崎 市
5	た ばた みさ き 田 畑 美紗貴	女	枕崎市立 枕崎中学校 2年	枕 崎 市
6	いわ た けい すけ 岩 田 圭 介	男	私立 鹿児島修学館中学校 3年	いちき串木野市
7	はま さき りこ 濱 崎 瑠璃子	女	鹿児島県立 国分高等学校 2年	霧 島 市
8	かみ まき み ほ穂 上 牧 美 穂	女	鹿児島県立 国分高等学校 2年	霧 島 市
9	む た ぼる み き 牟田原 美 貴	女	私立 鳳凰高等学校 2年	南さつま市
10	すず き みやび 鈴 木 みや美	女	私立 鳳凰高等学校 2年	南さつま市
11	まえ ほん み わ 前 原 実 和	女	知覧町立 知覧中学校 2年	知 覧 町
12	ぬる き ちあき 塗 木 ちあき	女	知覧町立 知覧中学校 2年	知 覧 町
13	かのう とも こ 叶 朝 子	女	鹿児島県立 与論高等学校 2年	与 論 町
14	ひ ら とも え 比 良 友 恵	女	湧水町立 栗野中学校 3年	湧 水 町
15	おの した のぞ み 尾 下 望 美	女	長島町立 川床中学校 3年	長 島 町
16	あん どう のぶ ろう 安 藤 伸 朗	男	鹿児島県立 志布志高等学校 3年	志 布 志 市
17	い き ま い 壺 岐 ま い	女	鹿屋市立 鹿屋女子高等学校 1年	鹿 屋 市

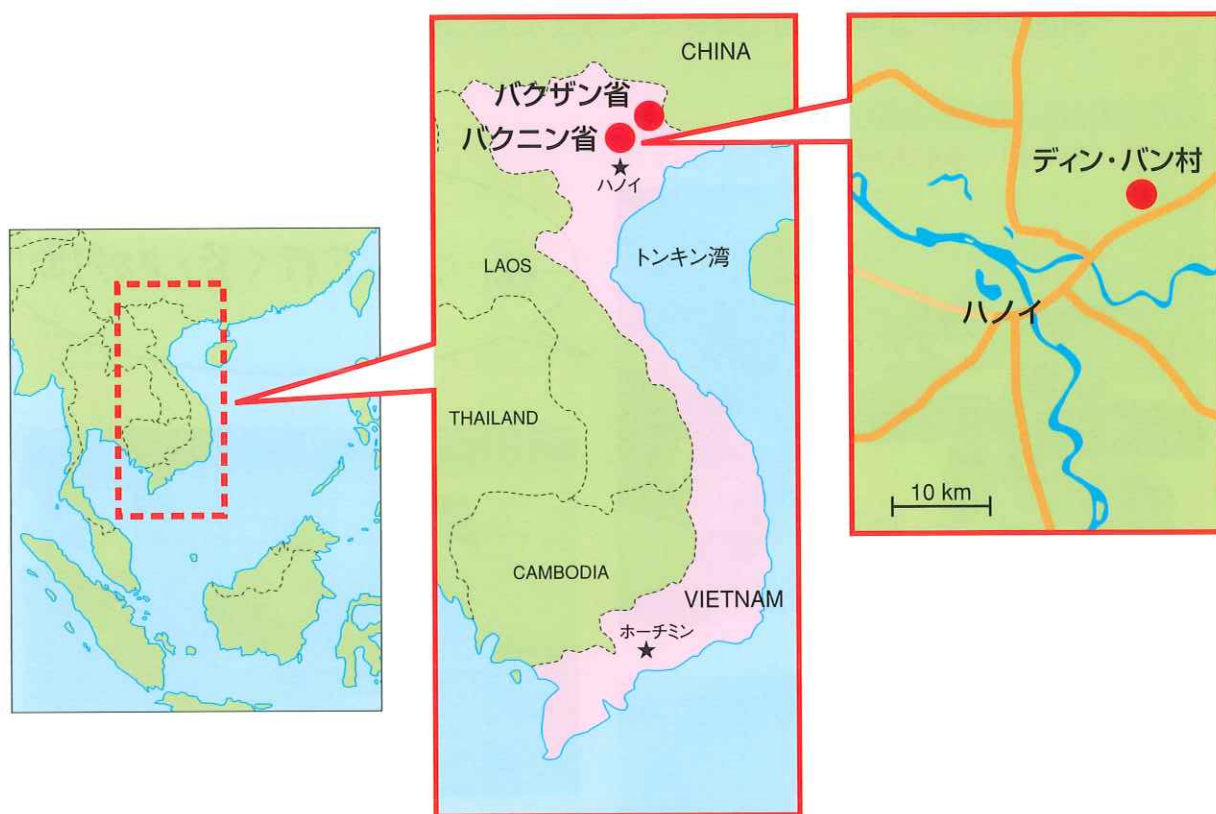
■ 同行者

	名 前	性別	所 属	担 当
1	にし むら りょう じ 西 村 良 二	男	財団法人鹿児島県国際交流協会 専務理事	団 長
2	やま した み ほ穂 山 下 美 穂	女	青年海外協力隊ベトナム OG (助産師) 鹿児島純心女子大学看護栄養学部勤務	調 整
3	かど の まこと 門 野 誠	男	青年海外協力隊ベトナム OB (診療放射線技師) 医療法人健翔会新町病院勤務	調 整
4	ま かの たか こ 真 茅 貴 子	女	青年海外協力隊ニジェール OG (小学校教諭)	調 整
5	おく むら よし こ 奥 村 佳 子	女	青年海外協力隊インドネシアOG (助産師)	健康管理
6	とく なが けん いち 徳 永 健 一	男	KTS 鹿児島放送 霧島支局長	

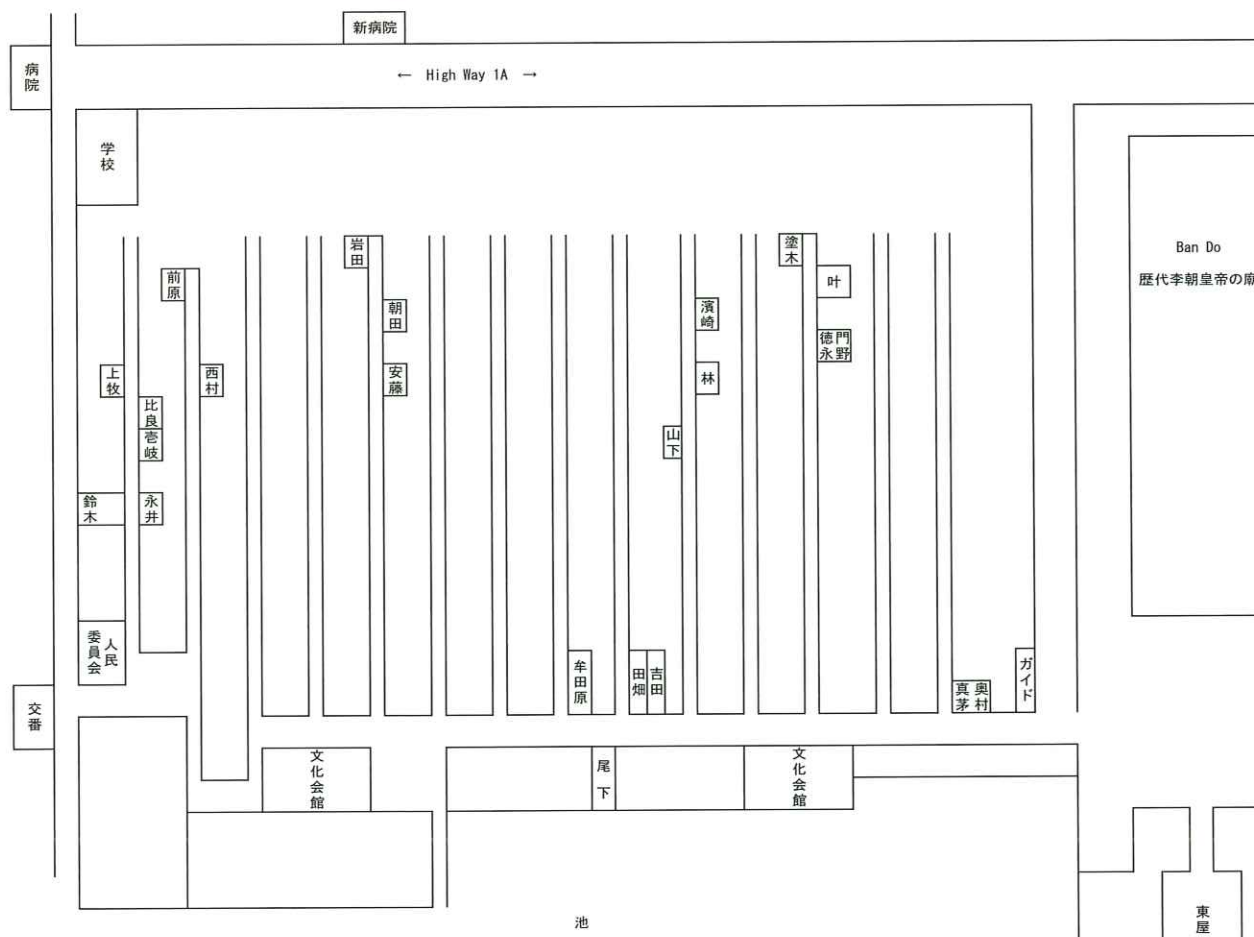
スケジュール

月日	曜	地名	時刻	交通機関	内容	宿泊
7月22日	日	鹿児島空港 ソウル経由 ハノイ空港	12:30 発 14:05 着 20:40 発 23:30 着	飛行機 バス	集合・チェック 結団式 ・空港→ホテルへ	ハノイ市 ホテル
7月23日	月	ハノイ市 バクニン省	10:00-11:30 午後	バス	●JICAベトナム事務所 表敬 ・ハノイ市→ホームステイ先	ホームステイ
7月24日	火	バクニン省	終日		●終日ホストファミリーと過ごす	ホームステイ
7月25日	水	バクザン省	10:00 14:00	バス	●青年海外協力隊 活動視察 ハンディキャップ・チルドレンビレッジ 新井智子隊員：理学療法士 ディンケ村 森田裕子隊員：村落開発普及員	ホームステイ
7月26日	木	バクニン省	終日 夜		●終日ホストファミリーと過ごす ●お別れ会食	ホームステイ
7月27日	金	バクニン省 ハノイ市	8:00 14:30-18:00 夜	バス	・ホームステイ先→ハノイ市 ●買い物 ●中高生との交流 青年海外協力隊：割田隊員派遣先 チルドレンズ パレス ●JICA関係者との懇談会	ハノイ市 ホテル
7月28日	土	ハノイ市	午前 午後	バス	●ハノイ市内観光 ●ハノイ市内観光, 買い物 →ハノイ空港へ移動	機内泊
7月29日	日	ハノイ空港 ソウル経由 鹿児島空港	0:05 発 7:10 着 9:55 発 11:30 着	飛行機	解団式	

地図



ディン・バン村 ホームステイ先



体験事業ドキュメント

～事前研修から帰国報告会までの様子を絵日記風にまとめました～

6月16日(土), 7月7・8日(土・日)

第1回・第2回 事前研修



一緒にベトナムに行く皆とネの対面!!



ベトナム語、て、本当に
難しいー...
だけど!がんばった

7月22日(日)

結団式・出発



いよいよ出発です!!
ベトナム待、ててネ♡



乗り換え地・韓国で



村で披露する出し物の練習。
ソウルで合唱!!
おかげで上手く出来ました。

ハノイに到着



やっと着いたゼイっ!! ドキドキ...♡♡

7月23日 (月)

ハノイの朝



JICAベトナム事務所 表敬



ベトナムの
内面事情を
聞いたリ、
いろいろと
勉強に
なります。

バクニン省ディン・バン村へ
ホストファミリーと対面



みんな愉快で楽しい!!
これからの日々が楽しみだ😊!!!

7月24日 (火)

村の様子



ベトナムの朝は早い!!
見るもの全てが初めてで—— (smiley face)



家族と一緒に
子どもたちと一緒に



バイク2人乗りなんて
当たり豆!!!
みんなファミリーと
仲良くなりました!

7月25日 (水)

青年海外協力隊活動視察
新井智子隊員 (理学療法士)



耳の不自由な子ども達が
ダンスを披露してくれました。
新井さんのお言葉、すごく心に
残りました。



森田裕子隊員 (村落開発普及員)



ここでは、一緒に、池の
浄化作業。
この「ダンゴ」を投げ
まくりました! 楽しかった ☺

7月26日 (木)

ホストファミリーと一緒に過ごします



みんなが家族みたいで、
誰が本当の家族!?
って感じてた。
ごはんも美味しくて、
みんな優しくて...
本当に家族になった気分。



お別れパーティー



ベトナムの女の友達に、
浴衣を着てもらいました。☺
私より、可愛かったゾ。☺☺☺

日本の踊りをみんなぞ!!
慣れなくても、
一緒に踊ってくれました。



7月27日 (金)

別れの朝



一緒に過ごしたので、
本当わすれが...。
だけど、すごく楽しかった。
忘れません。
ありがとう。



学校交流



ベトナムでソーラン節!!
みんなかなりの腕前!!
負けずまいかんど



7月28日(土)

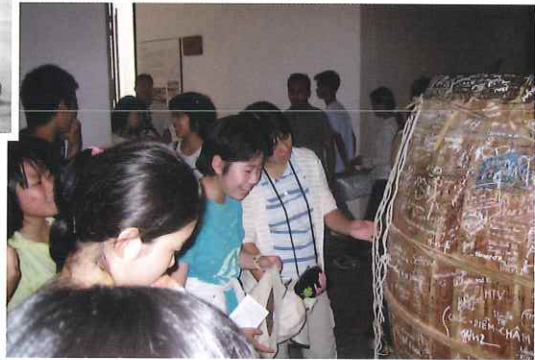
ハノイ市内観光



ベトナムの歴史や文化
に触れ、いろいろと考えさ
れることができました。

☆ ← 深い意味だった。

ホーチミンおじさん、
ベトナム人みんなの英雄



買い物



ベトナム ベトナム♪
「お土産どれにはよ、かなー」

早か、たね!
もう、日本に帰るよー
両手いっぱいのお土産と、
胸の、深い思い出

ベトナム出発



7月29日 (日)

解団式



日本に無事帰って来ました😊
疲れたけど、行って良かった!!

8月2日 (木)

表敬訪問

「ベトナムから帰って参りました」
いろいろと、本当に
ありがとうございました。



「みんなでこんな風に会えるのも、
もう最後かな」といつの向にか、
仲間だったよね。
みんな、ありがとう。

8月18日 (土)

帰国報告会



青年海外協力隊の意義

鶴丸高等学校 2年 林 コナン

本事業の目的である青年海外協力隊の視察を終えた今思うことは、このような活動は今までの人類の歴史上、類を見ない希なものではないか、ということである。と同時にこれは人類の一つの進歩ではないか、とも思う。

日本は戦後目覚ましい発展を遂げたが、フランスやベトナムと異なり、自ら勝ち取ったわけではない。言ってみれば「与えられた民主主義のもとで育っていった」のである。その成長過程の時代を生きていない若造が物言うのも気がひけるが、その過程で失っていったものは多くあるように思う。そして現在に至っているのである。品格に欠けている人間の台頭、考えられないような犯罪の頻発などなど枚挙に暇がない。日本は戦後発展はしたものの、精神的な面で進むべき方向を少し誤ったのではなからうか。

ベトナムは現在目下発展中だが、下手すれば、環境面においては日本と全く同じような路線をたどるようなことになりかねない。豊かさを求めることばかりに気が向き環境はいつの間にかひどいことになっていた、というふうに。そうならないように青年海外協力隊が派遣されているわけではあるが、自国に高い誇りを持った彼らベトナム人がその環境問題の重要さに気づけば、おのずと問題解決への道を歩むように思う。その誘導と手助けを担っているのが、青年海外協力隊であり、また日本にできる、所謂「国際協力」のひとつの形なのである。

先に述べたように、青年海外協力隊を「人類の一つの進歩」と表したが、なぜこう言ったのか。人間はこれまで殖民する、される、を繰り返してきた。それ



が反対に今では技術援助などで協力しに行くのだから大きな進歩と言えるのではないかと、との考えのもとこういう表現に落ちついたわけである。

日本はこれからこの青年海外協力隊というシステムを維持していく必要、もしくは義務があるように思う。歴史の罪滅ぼしといった意味合いもないとは言えないが、先進国の一員となった日本の果たすべき役割として当然あるはずである。これから豊かになろうとする国々に、失うものがないようにしながら成長してもらおうようにしなければならない。あの莫大な人口と広大な国土を持つ中国がそうならなければ取り返しの付かないことになり得る。結局、青年海外協力隊のように国際協力を果たすことで、日本の国際的立場は確固たるものになるのだと思う。日本は軍備を持たなければいつ外国から攻撃されるか分からないといった声もあるが、赤十字のように日本が活動していれば少なくともその確率は減るであろう。自分の国に支援をしてくれる国に攻撃するのはためらうだろう。これは単純でただの理想論に過ぎないと思われるのかもしれないが、私は、これが現段階でできれば最善策のひとつだと感じている。



本人：左

「言うのは易く行うは難し」の通り、このことも財政面などで壁があり、そうであるとは思いますが、自分たちの世代が中心となる時も最前を尽くしたい。つまり、はっきりいって、この貴重な機会に恵まれた団員の中から新たな隊員が出てこなければならない。この経験は単に経験として内に留めておくのではなく、将来、といっても早くても4、5年後に発揮してこそ意義があるのである。もしくはこれが契機となれば、である。

最後に、日本は、誇りや愛国心といった精神的な面で見習う、または振り返る必要があると思う。自国の文化に誇りを持ち、堂々、かつ穏やかに笑うベトナム人を見てふと感じたことである。そして、「優劣は文明にあっても、文化にはない」こう感じる。

青年海外協力隊への思い

玉龍中学校 2年 吉田 朱里

私が今回のベトナム訪問で一番印象に残っているのは、青年海外協力隊を自分の目で見て、活動体験することができたことです。青年海外協力隊というものを資料の中でしか知らなかった私にとっては、とても良い刺激になりました。

ベトナムでは、3ヶ所で協力隊の活動を視察することができました。まず最初は、障害のある小学生から、高校生までが通う学校を見学しました。その学校では、午前中に普通の授業を受け、午後からは職業訓練を行っていました。先生も生徒も全員明るく、楽しい雰囲気の学校でした。



2ヶ所目は、環境問題に取り組んでいる隊員の活動を体験しました。自分たちで清掃活動を行うだけでなく、地域住民に環境問題を意識してもらうための活動を行っていました。その活動のひとつである池の清掃を体験することができました。草やゴミを取り除き、水をきれいにする微生物入りの団子を投げ入れる作業です。最初は私たちだけだったのですが、作業が進むにつれて、地域住民が集まってきて、一緒に作業に取り組んでくれました。大勢でやる作業はとても楽しく、夢中で作業をしていました。かなりの重労働で大変ではありましたが、やり終えた後、とてもさわやかな気持ちになりました。地域の人々にもこの活動の意味を分かってもらえたように思えます。隊員の方も作業後の達成感や、地域の人々との関わりが楽しいと言っていました。

最後に中学生が通う日本語を取り入れている学校へ

行きました。その学校では、日本語の授業だけでなく、絵を描く教室、バレエ教室、武道教室など色々なジャンルの勉強ができる学校でした。私はその中で日本語を勉強している中高生と交流しました。クイズ大会や歌でコミュニケーションをとった後、一緒にソーラン節やおはら節を踊ったりしました。日本語を教えているのが隊員の方で、他の先生方からも慕われており、その隊員の指導で、ソーラン節などを通して学校のみならずと交流することができ、とても楽しい時間を過ごすことができました。

ベトナムで青年海外協力隊の活動を体験し、自分の持っていたイメージと少し違う印象を受けました。地域の人々との交流やつながりが想像以上に深いということ、隊員の方々が本当に楽しんで仕事に取り組んでいるんだなということ、イキイキと活動を行っている姿から感じることができました。

私は以前、資料の上でしか青年海外協力隊を知りませんでしたが、この事業において、青年海外協力隊の活動を直接体験することで、自分が青年海外協力隊に参加したいという気持ちが更に高まりました。出会った3名の隊員の方々のように、自分の得意な分野で活動できるよう、自分の能力をみがき、また、世界の他の国にも目を向け、知識の幅を広げていきたいと思えます。そしていつかは、私も青年海外協力隊の隊員として活躍したいと思います。



本人：中央

私のこれから

志學館中等部 3年 永井 昌美

私には夢があります。それは、いつか世界中のみんなを幸せにすることです。自分にそれができるかわかりませんが、絶対に叶えたいと思っています。私の夢を叶えるためには、自分をもっと内面的な面で大きくする必要がありますと思います。私は視野がせまく、偏った見方でしか物事を見ることができません。ですから、ベトナムという言葉も全然通じない国で、実際に青年海外協力隊員の方の活動している所を見たり、ホームステイをしたりして、日本では絶対にできないいろいろな事を体験して視野を広げることで、私の夢を叶えるための第一歩になればいいなと思い、この事業に参加しました。

事前研修の時点で一緒に行く団員やスタッフの方々はいいい人たちだということが分かったので、ベトナム行きに対しては全くと言っていい程不安はありませんでした。ベトナム語はとても難しく、自己紹介ぐらいしかしゃべることはできませんでしたが、「まあ、なんとかなるだろう」と楽観視していましたので、実際にベトナムに行ってからちょっと苦労しました。

青年海外協力隊員の方の活動している所を実際に見て、一番感じたのは「カッコいい」ということでした。活動している時の真剣な表情や、現地の人と話して笑っている顔はとても輝いていて、カッコよかったです。村落開発普及員の森田さんの言っていた「村落開発普及員の仕事は自分の仕事を探すところからはじまる」という言葉が心に残っています。猛暑の中、2時間程度池の浄化作業をしました。最初は私たちだけしかやっていませんでしたが、しだいに現地の人たちが集まってきて、「日本人がやってるんだから俺達も」みたいな事を言って一緒にやってくれました。「こうやって現地の人を巻きこんでやっていくのが大事だ」と森田さんが笑いながら楽しそうに言っていました。作業は地道なもので、私たちは初めてやるし、その1回切りなので楽しくやることができましたが、何日もやらなければならないのは大変だと思いました。それなのに森田さんがあんなに楽しそうに作業をしているのはすごいなと思いました。私もいつかあんな風になれるといいなと思いました。

ホームステイはすごく楽しいものでした。言葉は全

く通じなかったけど指さし会話帳を使っていろいろなことを話すことができました。一番大切なのは、言葉ではなく伝えようとする気持ちなんだなあと改めて実感しました。お客さんがよく来ていて、一回50人ぐらいでみんなで床にごぞみたいなものを敷いて夕食を食べました。普段の日本での食事も家族が多いのでさわがしいですが、それよりもさわがしくて楽しかったです。その時、私の周りには私と同じ歳ぐらいの子たちがいて、一緒に遊びました。ベトナムの子たちはフレンドリーで、すぐに友達になりました。家族もみんな優しく、私のことをすごく気にかけてくれました。ご飯の時も「遠慮しないでどんどん食べなさい」と言ってくれました。私のことを妹や娘だと言ってくれて、また会おうと約束しました。いつになるかわかりませんが、絶対に会いに行きたいです。お別れパーティーでヒンさんと一緒に大好きな歌を歌えたのもうれしかったです。いつかまた、あの優しい人達のいる所に行きたいです。

私がこの事業に参加して一番感じたのは、世界は本当に広いということです。ですから、もっと世界を見て、視野の広い人間になりたいです。また、矛盾している事ですが、言葉がなくても伝えようとする気持ちが大切で、がんばれば伝えられるということと、言葉というのは本当に大切だということを改めて学びました。ベトナムと日本はすごく遠いけど、すごく近くなった感じがうれしいです。ベトナムも日本も、たぶん世界中どこの国でも人の温かさは変わらないんだなと思います。いつか、夢を叶えてみせます。



本人：右から4番目



本人：ステージ上右

私のもうひとつの家族

枕崎高等学校 1年 朝田 清子

私の中の外国は、いつも本やテレビの中にあった。だから時々、テレビなどで紹介されている外国が現実味のない作りもののように思えてしまうことがある。今回この事業に参加したのもそれが理由だった。実際ベトナムでは、数えきれないほど多くの事を学んだ。その中でも日本に帰って来て一番心に浮かびあがってくるのは、ホストファミリーとの毎日だ。私はベトナムに行く前、何よりも言葉の壁がこわかった。私の言ったことはちゃんと伝わるのだろうか、ホストファミリーの方々と分かり合えるのだろうか、対面式の時も緊張しておなかがいたくなかった程だ。しかし、ホストファミリーのフーさんと会って家の中を案内してもらったり、自己紹介をしあううちにだんだんと打ち解けてきて、おなかの痛みも気付いたらなくなっていた。



本人：一番右

私は旅行に行っているフーさんのお孫さんの部屋を使わせてもらうことになった。お孫さんとは年が近かったので会ってみたかったなあと考えた。そのあとはいきなり別の家に案内されたが、その家は同じく団員の岩田くんのホストファミリーの家だった。ここはフーさんの親戚の家のように、ご飯も岩田君達と食べることになった。ベトナムではご飯は床にあぐらをかいて食べる。私は足がしびれたけれど何とかがんばった。ご飯はとてもおいしくて「おいしい」と言うところまでくれた。ご飯がおわったら子供達と夜の散歩に出かけた。ベトナムの夜は活気にあふれていて日が沈んですっかり暗くなったのに街をうろついていても何も言われなかった。若い人はわりと英語が話せるので英語とベトナム語会話帳を使っていろいろな話をした。その時は、心から楽しくてもう私の中に言葉や文化の壁に対する恐れというのはなくなっていたのだら

う。どうしても言いたいことが伝わらない時や、ついていけなくなる時もあるけれど、そんな壁に体あたりしていかなくちゃならないんだと思った。

次の日は一日自由で、午前中はお寺で小さい子供たちと、日本からもってきた折り紙やこまであそんだ。そよ風が吹き抜けるお寺の中は涼しくて子どもたちがたくさん集まってきた。紙ふうせんやピョンピョンかえる。この日のために練習してきた折り紙をいろいろと披露した。午後は部屋でゆっくりしていた。時々フーさんがやってきて、いろいろ話したりした。もっといろいろなことを経験したかったし、いろいろな話をしたかったのだが、私は26日、ホームステイ最後の日に体調を崩してしまった。フーさんは心配して何度も様子を見にきてくれた。私は結局病院へ行くことになり、もうすぐ病院に行くための車がつくという時にフーさんがやってきて私に何かを手渡した。それはDVDと手紙だった。手紙には「このDVDは記念品なのであげます。あなたの幸せを祈っています」といったことが書かれていた。私はうれしくてうれしくて涙が止まらなかった。病院に向かう前に私はベトナム語の会話帳を使って「プレゼントはとてもうれしかった。ありがとう」と言った。フーさんは笑ってだきしめてくれた。これが私とフーさんとのお別れになった。たった4日間だったけど私に家族のように親身になって接してくれたフーさんは日本に帰ってきた今でも、私のもう一つの家族だ。言葉や文化がちがっても人は分かり合えるんだということが分かってとてもうれしかった。私はいつかまたベトナムに足を運んでフーさん達に会いに行こうと思う。その時は、ベトナム語も少しは覚えてもっといろいろなことを話したい。ついこの間まで外国というものはぼんやりしていて現実味のないことだったけれど今は違う。私は実際にベトナムという異国に行って言葉や文化のちがう人々と解りあうことが出来た。きっといつまでも忘れないだろう。本当にこの事業に参加してよかった。



本人：中央

ベトナムでの7日間

枕崎中学校 2年 田畑美紗貴

私は以前から、日本以外の国にはどんな習慣や文化があるのかとても興味がありました。そして念願の夢が叶い、この体験事業に行くことになりました。初め、事前研修が2回あり、ベトナム語やベトナムの歌などを勉強しました。ベトナム語は思っていたよりも発音が難しく、このままベトナムに行って大丈夫なのだろうかと心配になりました。そしていよいよ出発の日が来て、私は大きなスーツケースひとつで鹿児島空港にいました。そのとき改めて、今からベトナムについて、そして青年海外協力隊について色々なことを学びに行くのだと感じました。鹿児島空港から韓国のインチョン空港に行き、そのあとハノイの空港行きの飛行機に乗り換え、ハノイに着いたのは深夜でした。ハノイの町に一步出てみると、とても暑くて驚きました。その後バスに乗り、ホテルに向かいました。ホテルでは明日ホストファミリーの人たちと会えると思うとドキドキして眠れませんでした。

次の日、バスに乗って JICA を訪問したあと、バクニン省のディンバン村に向かいました。村の人たちは



本人：右から2番目

私たちを温かく迎えてくれて、歌を歌ったりしてうちとけあえて不安は吹き飛びました。そのあとホストファミリーのおじいさんと対面し、家まではバイクに乗って行きました。私はバイクの2人乗りは初めてで、すごく恐かったです。家に着きホストファミリーの皆さんは私を温かく迎えてくれてすごくうれしかったです。

次の日は15歳の息子と親戚の小さな子と一緒にいる



ハンディキャップ村の子どもたち

色々な所に行きました。興味深い物が沢山あってとても楽しかったです。それから次の日は青年海外協力隊の視察をしました。はじめに理学療法士の新井さんのいるハンディキャップ村に行きました。そこで子供たちについて、そして理学療法士について話を聞きました。そのあと子供たちと一緒に折り紙をして遊びました。それから村落開発普及員の森田さんと会い、一緒に池の清掃をしました。最初は日本人だけで池の清掃をしていたのですが、あとからベトナムの人たちも一緒に協力してくれて、とても感激しました。清掃が終わったあとに4人の協力隊の人たちと一緒にお昼ご飯を食べました。そこでいろいろなことを質問したりしました。協力隊の人の話を聞いてすごくこの仕事は大変なのに笑顔をやさず、がんばっている姿がすごくカッコいいなあと思いました。家族と過ごす最後の夜は、村民の皆さんがお別れパーティーを開いてくれました。私はそこで弓道の型を披露しました。ベトナムの人たちは珍しそうに見ていたので少し緊張して、なぜだか笑いました。そして時間はあっという間に過ぎ、お別れの時がやってきました。私はいつかまた会おうと約束し別れました。最後の日は観光で、ベトナムで有名なホーチミンさんという人のお墓に行こうとしたら沢山の人がいて入れませんでした。その時私は、ホーチミンさんはベトナムの人たちに尊敬されている偉大な人だということを実感しました。お昼からは買い物をして人生で初めて値切ってみました。値切るのは思っていたよりも簡単だったけど値切った後の値段をきくのが大変でした。そしてついに日本に帰る時間になってしまいました。

私はこの1週間を思い出してすごく楽しくて、いい勉強になったなと思いました。今回この事業に参加させてくださってありがとうございました。

青年海外協力隊の姿を見て

鹿児島修学館中学校 3年 岩田 圭介

今回、この体験は本当に良い思い出になった。僕は、帰国後そう思った。行く前は、あれ程不安だった今回の旅は、本当に良い思い出になり、色々な事を学べた。改めて本当に良い旅だったと思う。

ベトナムで過ごした日々は長いようで、あっという間だった。ベトナムで体験した色々な事や、大変だった事が今になって、ようやく整理出来た気がする。本当に色々な事があって、その全てがいい経験になったと実感している。その中でも一番思い出深いのは、やはり青年海外協力隊の活動視察だ。

そもそも今回の旅の一番大きな目標は青年海外協力隊の視察だ。話には聞くが実際にその活動を見る、という機会は無いだろう。そんな機会を得られた僕たち17人には同時に日本代表としての責任があり、若干緊張した。

まず最初にハンディキャップ村という日本でいう盲学校のような所で活動している理学療法士の新井智子さんの活動を視察した。ハンディキャップ村は障害を持つ子ども達が勉強をしたり職業訓練をする場所だ。施設見学をした時に刺繍の教室も見せていただいたが、作りかけの刺繍が置いてあった。その刺繍が本当に綺麗だったのを今でも覚えている。ハンディキャップ村では施設見学の他にも、子ども達が僕たちのためにダンスを踊ってくれたり、子ども達と一緒におりがみを折って遊んだりした。子ども達は本当に表情豊かで、一緒に遊べた時間はほんの十分間程だったが、とても楽しかった。

次に、村落開発普及員の森田裕子さんの所へ視察に行った。森田さんの所では、森田さんが現在行っている池の浄化作業の手伝いをした。池からは悪臭が漂い、空からは太陽の光が容赦なく降り注ぐ過酷な状況の中、微生物の入った泥団子を池に投げ入れたり、池に生い茂る水草を陸に鍬で引っ張り上げたりした。そしてここで一つ感動した事があった。それは、最初は見ているだけだった池の近くに住んでいる住民達が、やがて手伝い始めて、段々人が集まってきて、終わりには、道が住民達で埋め尽くされるまでになった。僕はこの時、小さな、本当に小さな事だけど、確かに国際協力を感じた。本当に大変な作業だったけど、僕は充

実感で満たされていた。

実際に隊員と会い、話を聞いて思ったことは、隊員の方々は自分の仕事にやりがいを持って、楽しく、そして一生懸命に頑張っているという事だ。隊員の方から、迷いとか後悔は感じられなかった。本当に輝いていた。

僕は今回の旅で本当にかげがえのない何かを得た。現地で活躍している隊員の姿を見て、ホームステイでベトナムの人々の優しさに触れ、そして国際協力の大切さを実感して日本に帰ってきた。次は、僕たちの番だ。ベトナムで体験した事を一人でも多くの人に伝えて国際協力に関心を持ってもらう、それが今の僕に出来る国際協力なんだと思う。僕は今回の旅で得た「何か」というのが、いったい何なのかを知るために、自分の夢である外交官を目指して今回の旅で学んだことを忘れずに頑張っていこうと思う。



本人：右から3番目



障害児施設でおりがみを教えました。

私が出たこと、 そして、路上のメッセージ

国分高等学校 2年 濱崎瑠璃子

ハノイ空港に着き、不安と期待で胸をいっぱいしながらバスに乗った夜、ホテルの部屋で次の朝が待ち遠しく感じられました。

次の朝、窓の外からひっきりなしに聞こえてくるバイクのクラクションの音を聞いて「ああ、ここは日本じゃないんだ、ベトナムにきたんだな」と改めて感じ、それと同時にこれからの1週間異文化を肌で感じ、帰国してからはベトナムでの体験をより多くのことを日本の皆さんに伝え、ベトナムの素晴らしさを理解してもらうために、今ここで浮かれてばかりではいけないなと思った朝でした。

JICA事務所訪問で、協力隊は自分の思っているよりも幅広い範囲で活躍されていて、ベトナム側からも隊員を必要とする分野が増えてきているということ、初めは主に医療関係だったが、今では卓球などのスポーツや村落開発などの環境面でも活躍していることを知りました。ベトナムの方々に隊員を必要としてもらえるよう、隊員の方々がどれだけの努力をし、信頼を得たのか、もし自分が隊員であればとおきかえた時、私は当たり前のことながら、「憧れだけではやっていけないな」と思いました。この後、ホストファミリーと会って一緒に生活するのに、文化も習慣も言葉も違う環境でやっていけるか少し不安が大きくなりました。

いよいよホームステイ先に着き、ホストファミリーのお父さんが家までバイクの後ろに乗せてくれ、案外乗り心地が良く安定していることを知り「バイクも悪くないな」と実感していると、狭い路地に入り三階建ての家前で止まりました。お父さんのドアンさんにうながされて中に入ると、天井は吹き抜けになっていて、すぐ右には壁に沿うようにらせん階段があり、想像していたよりも綺麗でしっかりとした造りをしていることに驚きました。何よりも出迎えてくれたお母さんのゾオンさんと妹のヌエのあたたかい笑顔にいやされ、少し大きくなっていた不安が、これからのホームステイ生活への期待にかわりました。しかし、簡単な会話さえも伝わりにくく、コミュニケーションをとるために浴衣を着せてあげようとしても、なかなか通じません。十分か十五分、会話帳や簡単な英語を使って

やっとで通じ、着付けすることができました。ヌエも喜んでくれ、その後帰って来た姉のフオにも着せてあげると、フオも大変喜んでくれました。しかし、私が思ったことは、いつもならもっと簡単に当たり前のように通じることは、本当は当たり前なんかではなく、自分の使う言語が通じる日本にいる私は恵まれているのだと感ずることができました。しかしながら、今私がいるのは日本ではなくベトナムなので、当たり前だと思っていたことが、当然のようにできない、だからと言って悩んでも仕方がない。私はいつも笑顔でいようと心がけ、笑顔でいました。すると返ってくるのは笑顔ですから、何だかとても楽しくなってきた、カタコトの英語やベトナム語でできる限りたくさんしゃべりました。ここで私が出られたのは「伝えたい」という思いがあれば、伝わらないということはないんだという確信でした。私の訪れた村はたくさんの人の笑顔と、子供の元気な声と時々聞こえてくる叱られて泣いている子供の声であふれていました。いいところばかりしか見えませんでした。

しかしホストファミリーと別れて、バスでハノイの街を走っているとき、私は若い男性が路上で果物を売っていたお婆さんの、その商品を盗んで逃げる瞬間を見ました。お婆さんもその男性を追いかけてやりましたが、すぐに諦めてもとの場所に戻ってしまいました。その光景はあまりにも突然に私の目にとびこんできました。とても悲しくて何ともいえない気分になりました。私は村でたくさんの素晴らしい人、物、あらゆるモノに出会いましたが、ここには私たちが日頃見て見ぬふりしてしまう、一番真正面から向き合わなければならない現実がありました。何が男性をこの様にしてしまったのか、また、お婆さんが諦めなければならない環境を何が作ったのか、とても大事なサインをおくられた気がしました。



本人：一番右

ベトナムで学んだこと

国分高等学校 2年 上牧 美穂

ベトナムで一番印象的な出来事は、ベトナムの青年海外協力隊の活動を見学するために訪問したハンディキャップ村です。そこは、体に障害を持つ子ども達が親元を離れ、勉強をしたり、社会へ出るための訓練をしたりする施設でした。日本の常識から考えると、こういった施設には、リハビリのための器具や安全のために整えられた綺麗な環境があるものだと思っていましたが、その施設には器具も少なく、窓が割れていたり私たちの生活ではあり得ないような状況でした。これは、ベトナムの障害者へ対する知識や理解がまだまだ足りないということなのかなあと思いました。



本人：一番右

そんな中でも施設の子も達は、皆すてきな笑顔をもっていて、そこで活動する協力隊の方も負けなぐらいの笑顔だったので、私はみんなから元気をもらったのと同時に、もっとたくさんの人が障害者について関心を持つべきだと思ったし、障害者にも住みよい町をベトナムだけでなく日本やほかの国も築くべきだと思いました。

また、ホームステイではただの観光では体験することのできないベトナム人の生活リズムや食を体験することができました。道端の屋台や、お昼寝、近所の人達との談話や子どもたちの遊び、そのどれもが日本にはないゆっくりとした時間の流れで、少し戸惑うこともありましたが、とても心地よく、このままベトナムに住みたいと思うほどでした。

最初は、ベトナム人は大人しい人が多いのかなと思っていただけで、一度家族の輪の中に入ると、ホストファミリーや近所の人是一日中雑談をしたり、冗談を言い合ったり、友好的で、言葉が分からなくても、笑顔や身振り手振りで通じ合えたので、言葉よりも伝えたいという意味が大切なんだと改めて思うことができました。

今回、ベトナムへの国際協力体験事業で私は人と人との関わり方、笑顔の大切さを学ぶことができました。ベトナム派遣の当初は、ただベトナムはどんな所だろうとか、ホームステイをしたいとか、ささいなことしか考えていませんでしたが、実際ベトナムへ行って、自分の目で見て、耳で聞いて、体で感じたことは、もっと世界について知りたい、いろいろな人の役に立ちたいとか、自分の人生を変えてしまうぐらいの大きなものでした。

ベトナムへ行っていろいろなことを学んだ分、またいろいろなことを学ばせてくれた人達のために、自分が見たこと感じたことを、沢山の人の知ってもらいたいし、今自分ができること、やらなければいけない事を全力で取り組んでいきたいです。そしていつの日か、もう一度ベトナムへ帰って、今より発展したベトナムを見てみたいです。



本人：右から2番目

私を感じたこと

鳳凰高等学校 2年 牟田原美貴

この事業に参加したきっかけは、日本を離れて海外に目をむけてみたいという気持ちと、何より、青年海外協力隊に興味があったからです。

青年海外協力隊の活動内容は、よくテレビや新聞などで目にしている、異国の人のために海外で協力するということはとても素晴らしいことだと思っていました。

言葉が通じないことや、日本を離れる不安、慣れない生活など、大変なこともあります。そのかわりに現地の方の笑顔が見られたり、感謝の言葉を言われたりすることを考えると、とてもやりがいのある仕事だと思います。そして、本当に自分が望んで行ったなら、どんなに厳しい環境の中でも楽しく過ごせるだろうなと感じました。

私は、事前研修の時ベトナムは、お風呂やトイレもない、それ以前に電気も通っていないような場所だと思っていましたが、実際ホームステイ先に行ってみたら、日本とあまり変わらない生活環境でした。ですが、昼間はとても暑苦しく、大人も子供もみんなが昼寝を

していてとてもびっくりした反面、日本では絶対にないことだと思い少し笑ってしまいました。

しかし、一方で青年海外協力隊の活動をしている現場は、道路もきれいに整備はされておらず、下水道がないため汚水が池に流れこみヘドロがたまっていました。

私たちは、1日だけの訪問だったので、池の一番最初の状況はわかりませんが、隊員の方がガスの匂いも減ってきているとおっしゃっていたので、最初はそんなにひどかったのかとビックリしました。

実際に活動を体験してみて、最初みんなとてもはりきって頑張っていたのですが、気の遠くなるような作業の繰り返しで、本音では、この協力隊活動はとてもツライなと改めて感じました。テレビや新聞だけではとても感じられない、貴重な体験ができて本当に素晴らしい経験となりました。

そして、何より隊員の方の熱意がすごいなと思いました。隊員の方が頑張ってくれているから現地のベトナムの人と一緒に活動していて、強い絆だなと思いました。そして、それは隊員の方が、相当努力した結果なのだと思います。

将来、私は看護師となって世界を駆けまわり、出来る限り世界の人々を助けていきたいと思っています。そのためには、まず自分が今なにをできるのか考えて、行動し、立派な人になりたいです。



協力隊活動現場にて池の浄化作業の手伝い
本人：緑のTシャツ



本人：右から二番目

初めて国際協力を体験して

鳳凰高等学校 2年 鈴木みや美

この企画で何より楽しみにしていたのが、ベトナムの家庭でのホームステイでした。

以前から外国へ行ってホームステイをするのが夢で、また、外国へ行くということが昔からの憧れでもありました。それが、このようなかたちで実現することが出来て本当に嬉しく思い、この企画に携わった方々や家族、仲間感謝で一杯です。



聴覚障害がある子どもたちのダンス

そして、周りからの期待に応えることが出来るよう、ベトナムで様々なことを吸収し、自分のものにしていくことが出来ました。

まず、一番興味深かったのが3日目に行った、ハンディキャップ村の学校での青年海外協力隊活動視察です。私自身、青年海外協力隊になることが夢で、看護師を目指して現在勉強している中で、このような体験をすることができ、色々な視点から医療について学ぶことが出来ました。

ハンディキャップ村では、主に聴覚障害の子供たちが親元を離れて生活しており、学校では健常者が一般に勉強することを同じように学習し、子供たちが自立して職に就き、働くことが出来るように職業訓練も行われています。その職業訓練というのが、ベトナムで有名な刺繍や、ミシンなどといった本格的なものであったし、何より授業を受ける姿勢が本当に真剣で感心しました。そして、一番驚いたのが、聴覚障害の子供たちによるダンスでした。皆の息が合っており、落ちついて丁寧な踊りを見せてくれ、感動や驚きで一杯で、子供たちの頑張りや強さに勇気づけられたような気がします。

この施設には他に知的障害、身体障害、言語障害など様々な障害を持った子供たちが数多くいます。その子供たちを支えるのが教師の他に、理学療法士、看護

師、医師などです。

このようにどれだけ多くの障害を持った人々がどれだけ多くの医療従事者を必要としているか、青年海外協力隊の方の話も聞いて、大変思い知らされました。

この経験を通して私は、更に国際協力への意識が高まり、私に何か出来ることはないかと考えるようになりました。

次にベトナムでの最高の思い出となったホームステイでは、4日間もの間、日本語を使わずよく生活が成り立ったなあと思う程、言葉の大切さを身をもって感じる事が出来ました。時には、言葉で通じないことがあり大変苦労しました。しかし、決してあきらめずに、ジェスチャーでも絵を描いてでも何とかして伝えようと必死でコミュニケーションをとる努力を怠らないよう努めました。また、ただ遊んだりするだけでなく、ベトナムの家庭の日常生活と一緒にして、食事の準備から後片付け、掃除、洗濯、昼寝なども経験させて頂き、本当に違った世界にいるようで、不思議で、新鮮な気持ちになることも多々ありました。そのたびに、外国にいるという実感が沸いて、国際的な立場で関わろうとしている自分自身を意識していました。それから、ただベトナムの文化などを学ぶだけでなく、ホストファミリーを始め、近所の方々や親戚の方々に、日本の文化や習慣などを実際にやってみせて、日本を紹介することを忘れませんでした。まず、日本の食べ物をつくって紹介しました。みそ汁は大好評でしたが、ふりかけは好き嫌いに別れてしまったのが少し残念でした。また、まんじゅうやせんべいなどの和菓子も食べて頂いたところ、甘いと好評で、しかも、お茶と一緒に食べるということを知っていたらしく、教えてくれました。そして、同じ年のホストファミリーの子が、日本に詳しく、浴衣を着てみたいと言って嬉しかったことばかりでした。私もアオザイを着せて頂いて、本当に良い思い出ばかりとなりました。

このベトナムでの経験で、看護師や国際人を目指す自分は大きく成長させられ、これからの未来に強く影響すると思っています。



本人：一番右

ベトナムでの1週間を通して

知覧中学校 2年 前原 実和

私はベトナムという国をほとんど知りませんでした。事前研修でベトナムの事をいろいろ勉強しました。ベトナム語は発音がとても難しく、何回も何回も練習をしました。

出発当日、私はとても緊張していました。初めての海外だったし、ホームステイ先でうまくやっていけるか心配だったからです。不安がつの中とうとう出発。期待と不安を抱えながらの出発でした。ソウル空港では、おはら節の練習や歌の練習をしました。

ハノイ空港につくと、もう外は真っ暗で、全く外の様子が分かりませんでした。一歩外に出ると、とっても暑くて、じめじめしていて苦しいくらいでした。でもハノイの夜景はとってもきれいでした。

次の日、いよいよホストファミリーとの対面です。少し緊張していました。「どんな人か。やさしい人だろうか…」などと考えていました。私のホームステイ先のお父さんは、やさしそうな人でした。私のホストファミリーは、お父さん、お母さん、娘さんの3人家族です。お母さんは、少し気が強くて、少し困りました。特に夕飯のときに、お父さんやお母さんに「もっと食べなさい。もっと食べなさい。」と言われたのが一番困りました。1日目はこんな感じで、少し大変だなと思いました。

2日目は自由行動でした。私は娘さんと一緒にお寺に行きました。バイクに乗せてもらったのですが、ヘルメット無しだったので少し心配でした。でも、日本では出来ない事ができて楽しかったです。そして道路に出ると、みんなバイクに乗っていて、ヘルメットをかぶっている人は誰一人いませんでした。お寺はとっても広くてのんびりとしていました。ベトナムのお寺は日本とは違って、1つの大仏ではなく、5つぐらい大仏があります。そして、お参りをして家に帰りました。

家に帰ってからビックリしたことがありました。それは、ベトナムには昼寝の時間があるということです。やっぱり暑い所は昼寝をしないと体がもたないんだなと思いました。

夕食は、またいろいろ出てきたのですが、ベトナムの料理は香辛料が強くて、私にとっては少し食べづら

かったです。でも、どれもおいしかったです。

3日目は、「青年海外協力隊」の視察をしました。理学療法士の人や、村落開発普及員の人のところに行きました。理学療法士の隊員がいるハンディキャップ村では、障害を抱えた子供たちがいました。でも、耳に障害を持っている子がダンスをしてくれたり、一緒に折り紙を折ったりして、とても楽しい時間を過ごせました。村落開発の隊員の所では、水をきれいにするための活動を体験しました。匂いや色がとてもきつくて、これを本当にきれいにできるのかなと思いました。でも、このような地道な活動をする隊員の人達のおかげでベトナムもここまで成長してきているんだなと思いました。

4日目は別の団員のホームステイ先に遊びに行きました。久しぶりに友達と遊べたので、とても楽しかったです。夜は「お別れパーティー」をしました。おどったり、歌ったりしました。

そして、とうとうホームステイも終わりました。家族の人はやさしくて、個性的な人が多かったけど、すごく楽しかったです。

そして、ベトナム最終日は観光をしました。「博物館」に行くとベトナムの昔の事を学びました。私には少し難しかったけど、ベトナムの人はすごい技術を持っているんだなあとと思いました。

この事業を通して、ベトナムには交通の問題、水の問題、教育の問題が多くあるんだなと思いました。私の将来にこの体験が役立つかわからないけど、いつかこの体験が役立つ日がくると思います。またベトナムに行くとベトナムの人たちの手伝いをしたいです。



本人：右から3番目



ハンディキャップ村にて

ベトナムに行って成長した自分

知覧中学校 2年 塗木ちあき

ベトナムに行ってまず初めに思ったことは「暑い」ということです。でもある程度予想はしていました。

バスの中から見るハノイの町並みは、夜遅いせいか、人が通ったり、バイクに乗ったりしているところは、あまり見られませんでした。

1時間ほどで着いたホテルは、多くの建物が建ち並んでいるところで、きれいなところでした。とうとうベトナムに着いたんだと実感しました。ホテルの部屋で、ホストファミリーはどんな人たちだろう、村はどんな所だろうと期待する反面、言葉は大丈夫かな、家族の人と早く仲良くなれるかなと、不安なこともありました。これから始まる1週間のことを考えながら眠りにつきました。

ディンバン村のお寺でホストファミリーと対面しました。最初に会った時、緊張しっぱなしで、何もしゃべることが出来ませんでした。私のうちは、お父さんが迎えに来てくれていました。私の荷物を引いてくれて、私はその後を歩いてついて行きました。家に着いて、家の大きさと広さにびっくりし、テレビ、炊飯器などの電器製品もそろっていました。中に入ると1、2歳ぐらいの男の子がいて可愛くて、なんだか一安心しました。

みんなそろって夕食を食べました。日本と同じようにご飯が出てきましたが、テーブルではなく、タイルの床にござのような敷物をしき、あぐらや立て膝など好きな格好でおかずを囲んで食べました。おいしかったです。家族の人たちがしゃべりかけているいろと教えてくれました。少しですが、会話が出来たことがとても嬉しかったです。寝る時も私1人なのに、広いベッドに扇風機をつけてくださって、涼しく寝ることが出来ました。ベトナムの朝は早いです。5時か6時ぐらいに起きて、家族の人と朝食を食べに行きました。ブンチャという揚げ肉のつけ麺などがおいしかったです。通りに出たらけっこう早い時間なのに大勢の人たちがバイクや自転車に乗っている姿が見られました。行く先々で、果物を売っている人、肉を売っている人がいっぱい、活気あふれていました。けっこうみんな夜遅くまで起きているのに、朝に強くて驚きました。ベトナムでは昼寝の習慣があるから元気なのかなと思

いました。

理学療法士隊員の新井智子さんがいるハンディキャップを持つ村の子たちの施設に行きました。機能訓練やはた織りなどの職業訓練をしているそうです。どんなところかなと楽しみにしていました。難聴の子どもたちが私たちにダンスを披露してくれました。振動や周囲の動きに合わせて踊っているそうです。私にはちょっと出来ないなと思いました。子供たちの可愛い笑顔で、なんだか私まで嬉しくなってきました。

次はズィンケ村にいる村落開発普及員の森田隊員のところに行きました。EM菌を混ぜた団子を汚染された池に入れて水をきれいにする活動をしていました。最初見た時ゴミの量と臭いにぞっとしました。私たちは1、2時間ぐらいの活動をさせてもらいましたがとても大変で、森田さんはいつもこれをやっているんだと思うと、とても大変だなと思いました。

他にもベトナムの中学生の人たちが英語や日本語、空手を習っているチルドレンズパレスというところにも行きました。一緒にソーラン節を踊りました。そこで活動している割田隊員が子供たちと溶け込んでいる姿が印象的でした。

私は今現在ベトナムで活動している54人の協力隊の人たちは、みんな多くの困難があるのだらうと思いましたが、私が会った協力隊員はみんな笑顔ですごいと思いました。尊敬しました。誇りを持って活動している人たちだと思いました。

私はベトナムに行って多くのことを学ぶことが出来ました。最初は不安ばかりだったけれど、帰ってきた今はすごく満足しています。ベトナムでは日本と違ったところもあって、けっこう戸惑ったけど、人の心の暖かさには変わりはないと思いました。

ホームステイ先の家族の人たちが見ず知らずの私を暖かく受け入れてくれたことに、心から感謝しています。だから私もどんな人でも受け入れられる人になりたいです。学んだことをこれからの自分に生かしていけたらなと思います。

また、機会があったらぜひベトナムに行きたいです。きっともっと発展した国になっていると思います。そこには青年海外協力隊員の汗が流れているのだと思います。忘れられない国になりそうです。



本人：後列右

ベトナムでの1週間

与論高等学校 2年 叶 朝子

ベトナムに行って、私が一番強く感じた事は、「人と人とがすごく近い」ということでした。それは、全く飾り気がなく、すごく自然で温かくて…。今の日本では、あまりないものでした。うまく言葉では表せないけれど、それはよそ者の私までもがずっとそこに居たような気になるほどのものでした。

私がこの事業に参加した理由は、以前から少し興味があった「青年海外協力隊」の活動視察があるということ。それから、言葉の全く通じない所で、私のことを全く知らない人達と関わってみたい。そこで、自分が大きくなれば、という思いからでした。

2度の研修が終わり、いよいよベトナムでの1週間が始まりました。ベトナムで一番長くお世話になるホストファミリーの方と初対面する前、私は、期待と不安を同じくらい持っていましたが、迎えに来てくれた、ズンさんという家族の方が私の方を強く抱き寄せて、満面の笑みを見せてくれた時、私は不安だったことを全て忘れることができました。ズンさんがあの時、見ず知らずの私に対して何のためらいもなく、あのような態度をとってくれたという事が私はとても嬉しかったです。この旅で一番嬉しかったことでした。



本人：右

ズンさんは、おばあちゃんと2人家族でしたが、家にいるのはいつでも2人ではありませんでした。近所の子ども達やお姉さん達…。いろんな人が出たり入ったり、ご飯も一緒に食べているし、勝手にテレビをつけたりして、みんな自分の家みたいで全く気を遣っている様子はありませんでした。今の日本では、絶対あり得ないことで非常識になってしまうけれど、ベトナム

ムではこれがごく普通だということ、そこにはプライバシーなんてなかったけれど、みんなの笑顔が素敵すぎたのでそれでもいいんだな、ここではプライバシーなんていらぬのかもしれないと思いました。みんなが家族みたいで、喧嘩もしてたけれど、だからこそきっと裏表がなく、自然で、みんながありのままにいられるんだろうなと感じました。そういうことが日本ではなかなか無いからすごく羨ましいと思いました。私も家族の一員として扱ってくれて、一緒にバイクに乗ったり、朝早くから市場に行ったり、洗濯したり、見るものも全てが初めてで、全部が目新しいことで、すごく楽しかったです。保育園の時に、虫とりに行った時の感覚と似ていました。



ホームステイ先の村の人たちと

青年海外協力隊の活動視察では、障害児学校の子も達との交流や、池の清掃活動などをしました。耳の不自由な子達のダンスや、一緒に折り紙をしたことなど、ほんのわずかな時間でしたが、すごく楽しかったし、なんだか勇気みたいなのをもらった気がします。日本を離れて一生懸命活動している隊員の方々が、現地の子も達と会話している姿は、日本人ではなく、すでにベトナムの人みたいでした。しかし、そう見えるほどたくさん努力して、言葉も違うなかきつというんな苦勞があったのだらうと思いましたが、隊員の笑顔はそれを感じさせないくらい素敵な笑顔でした。

私にとってのベトナムでの1週間は、長くも短くも感じられました。言葉が通じなかったけれど、精一杯やったつもりです。そして、たくさんの素敵な笑顔に出会えて良かったです。ズンさん宅にホームステイができて、本当に良かったです。

そして日本に帰って思うことは、もっと人と近くに居たいということでした。これからの人生で何かある度に、ベトナムで見たいろいろな場面を思い出さるうなと思います。ベトナムに行って本当に良かったです。ありがとうございました。

貴重な体験

栗野中学校 3年 比良 友恵

長いと思っていた1週間は、あっというまでした。中学最後の夏休みは、私にとってとても貴重な思い出となりました。

特に、ベトナムに行って印象に残ったのがベトナム人の優しさと食事の仕方と言葉の大きな壁でした。その事を教えてもらったのがホームステイでした。

私がホームステイをした家は、両親と13歳の息子と5歳の娘の4人家族でした。お父さんは民間企業の社長さんでお母さんは主婦でした。13歳の息子のバツは中学生で、5歳の娘のホワイアンはまだ幼稚園に通っていました。最初、私がベトナム語で話しても「ノーノー、ガパン～」つまり、「日本語で話されても分からない」という風に流されました。私は、自分なりにベトナム語を勉強したのに、それが通じなくて、ましては日本語と間違われて…。とても悲しくて半ば、諦めていました。「別にたった4日間だけだし、家族と関わりをもたなくてもいいや」と。そんな時、5歳の娘のホワイアンが私の部屋に入ってきてペラペラとベトナム語を喋って私に笑顔を見せてくれたのです。この笑顔で私は、元気と勇気をもらいました。きっとホワイアンはただ家に入ってきた‘日本人’に興味があったからかもしれないし、暇だったからかもしれませんが、でも、私はホワイアンのおかげでやってやるぞっ!!という気持ちになりました。それから、私は指差し会話帳を使ったりジェスチャーをしたりして伝えたい事を一生懸命伝える努力をしました。そしたら、家族の人も分かるとうとする努力をしてくれました。この事が一番嬉しかったです。また、言葉の大切さを実感しました。



本人：中央

そして、日本とベトナムの食事もとても違いがありました。ベトナムの食事は、いろいろな料理が沢山できてきました。いろいろな料理は、大皿に入っていて自分のご飯の上に食べたい料理をのせて食べるのです。汁物でもお茶漬けみたいにするので最初、戸惑いました。それに、お父さんやお母さんに「これは食べないの?」と聞かれて、まだ何も答えていないのにどんどん皿に入れてきたのも驚きました。日本では、大皿に入れて出す時もありますが、ほとんど小皿に1人分ずつ分けてあります。それに、「どんどん遠慮しないで食べて」という感じの言葉はいいですが、皿にどんどん入れるという事はなかなかまねだと思いません。たまに、近所の人々が来て勝手に食事をしていたこともびっくりでした。日本では親しき仲にも礼儀がありますが、ベトナムでは親しいからこそ礼儀なんていらぬという感じでした。



ホームステイ先の子ども

私がたった4日間のホームステイで学んだことは数多くあります。ひとつは異文化の違いを受け入れることの大切さ。ベトナムに行って初めて気づくことはたくさんありました。日本ではありえないことや、自分が今までの生活で体験したことがなかったことでも、それがベトナムの文化でホストファミリーの家の普通なら、私もベトナムにいる間はそうする努力をしました。そして、言葉の大切さ。ベトナム語も日本語も言葉が持つ力は変わりませんでした。だから、まず相手に伝える努力をしないといけないということです。そして、友達。私の身の回りにはとても優しい人達ばかりでした。たった1週間でも周りの友達がいたからこそ充実して楽しい日々が送れたんだと思います。

私は、このホームステイを通して文化の違い、言葉の大切さ、友達の大切さ、家族の絆を知ることができました。ベトナムの家族と大切な仲間も得ることができました。今回、ベトナムで学んだことを今後の生活に活かしたいです。また、ベトナムの文化を沢山の人の人に伝えたいです。

ベトナムでの1週間

川床中学校 3年 尾下 望美

7月22日から1週間、ベトナムという地を訪れた。目的は青年海外協力隊の隊員の方々に直接会って活動や現場を知ることだった。

現地で活動している3人の隊員と出会った。ベトナムに行って、たくさんあるうちの一部だったが直接自分の目で活動を見て、簡単な作業や子ども達との交流など、様々な体験をした。今まで青年海外協力隊と聞くと、ものすごく大きな仕事をして発展途上国の発展に努める苦しい現場を想像していた。しかし、実際に出会った隊員の方々のお話や青年海外協力隊について知ることによって、実際は想像と全く違っていただけに気がついた。大きな仕事だと思っていたけれど、実際はもっと身近にある小さなことであって、その小さなことをコツコツと頑張る隊員の表情はとてもいきいきしていた。その姿がとても格好良く見えた。誰かの役に立つ仕事につきたいと思っていたから、そんな隊員の方々にあこがれを持っている。



本人：一番右

6日目に訪れた「チルドレンズ・パレス」という所は、子ども達に日本の文化や言葉などを教える塾のような所だった。そこで出会った割田隊員は子ども達との交流の時間を作ってくれた。皆、日本語を勉強していて、席が隣になった女の子とも少し日本語で話すことができた。何を質問しようか指差し会話帳を一生懸命めくっていると、「好きな人はいますか」という質問が目に入ったから、指差しながら聞くと、予想していたのとは全然違った答えだった。彼女は日本語で割田先生と答えた。私は驚いて、もう一度聞くと同じ答えが返ってきた。こういった素直さが、ベトナムの人々

と出会って、改めて知った人の良さだった。

合わせて3日間、時間にするとはほんの少しだったが、現地で活動する隊員の皆さんがベトナムの人々を愛し、ベトナムの人々も隊員のことを愛しているというのが、話している言葉の意味は分からなくても明るく楽しそうな表情から感じ取ることができた。



学校訪問で日本舞踊を披露

1週間のうちの4日間をホストファミリーと過ごした。私がお世話になったステイ先には、おばあちゃんが一人で住んでいた。わたしは1日目から不安でいっぱいだった。おばあちゃんには、娘が2人と息子が1人いて、それぞれが家庭を持っていて近くに別々で住んでいることを知った。たまに次女の家族が遊びに来てくれた。子どもが2人いて2人ともすごく幼かった。1日目に出会った2歳くらいの弟の方にあめをあげた。するとそれを口から出して床に思いきりたたきつけた。驚いたが、3つ目でやっと気に入ってくれたようだった。3日目に出会った兄の方は、しっかり者で見た目は8歳くらいに見えた。聞いてみると13歳。私と1つしか変わらないことに驚いた。ステイ先の村で出会った人達は私を気づかってくれたのか、いつも指差し会話帳を使って話しかけてくれた。実際に私も指差し会話帳に頼りっぱなしで、会話帳が無いと相手の言葉がまったく分からなかった。しかし、驚いたことに、最終日に完璧というわけではないがおばあちゃんに話しかけられた言葉の意味が指差し会話帳なしでも理解できた。1週間の研修の中で自分の成長を一番強く感じた瞬間だった。

この1週間で出会った人達の優しい気持ちに触れることができ、日本でお世話になっている両親や家族、友達、学校の先生方にも感謝の心が生まれた。

本当にこの体験事業に参加できて良かったです。

ベトナムに行って

志布志高等学校 3年 安藤 伸朗

今回ベトナムに行って本当によかったと思っています。行く前までは、ベトナムにほとんど関わったことのない人達と行くというのが不安だったし、食べ物が合わないんじゃないかと言うことも不安でした。ホストファミリーの所へホームステイをするというのも自分にとっては結構ハラハラするようなことでした。とにかく考えたらキリがなかったです。



本人：中央後

実際ベトナムへ行って、ホテルやホームステイ先でご飯を食べる時、思っていた以上においしくて、腹いっぱい食べることが出来て幸せでした。確かに苦手な食べ物もありましたが、ほとんどの料理が日本人に合うんじゃないかと思うぐらいのおいしさで、ホストファミリーも指差し会話帳を使って料理の説明をしてくれたりしたので、楽しく食事することができました。

ホームステイ先でビックリしたのが、みんな昼寝をしていたことです。僕らの考えるような昼寝じゃなくて、かなり本格的な昼寝で、店の人も店の中で爆睡していて、通りにはほとんど人もいなく、家の中は自分の家の門まで閉めて寝ていたのにはビックリしました。ベトナム人が夜あんなに活発に動くのはずっと寝ているからなんだろうなあとと思いました。

次の日にバクザン省で青年海外協力隊の活動視察をしました。新井智子さんは、理学療法士で耳が聞こえない子供達などを相手に活動していて、ベトナム人のゆっくりとした仕事の進め方などに困ったりするというような話をしてくださったりしました。

森田裕子さんは、村落開発普及員で、池の浄化作業を行っていました。ベトナムの人にまず自分が一生懸命やっている姿を見せないと、ベトナムの人はやろ

うと思わないと話してくれて、なんだかカッコイイなあとと思いました。その日、ホームステイ先に帰ると、ガワジさんが遊びに行こうと言うので、圭介と3人でバスケットボールとバドミントンのコートがある所へ行って遊びました。バスケが好きらしい男の子と1対1でバスケをしたりして楽しく過ごせました。やっぱりどこの世界に行ってもスポーツはみんながするものなんだなと思い、感激しました。

次の日は、ホストファミリーと1日過ごし、お別れ会をしてみんなで楽しみました。その次の日は、朝、ホストファミリーと悲しいお別れをして、チルドレンズパレスというところで子どもたちと交流しました。日本語を勉強していて、自分達と年齢がそんなに離れていないような子と仲良くなり、色々話をすることができました。その日の夜にチルドレンズパレスに来ていた数名の隊員の方々と食事をして、青年海外協力隊の活動内容、ベトナムでの生活など、いろいろ話を聞かせてもらい、いい時間になりました。

最終日のハノイ観光と買い物は疲れました。特に買い物。人生で初めて買い物で疲れました。歩いて物を売っている人が近づいて来て、その物を売りつけようとするのを拒否するのに疲れたし、とにかく歩いたので疲れました。でも買い物の交渉したりして楽しかったです。



子どもと一緒にバスケットボールをしました

今回ベトナムに行く前まで、色々な事で悩んでいた自分がなんなのか分からなくなるぐらい楽しかったです。コナンも圭介も男は3人なのに頑張ってくれたし、だらしない自分が色々世話をかけたのに一緒に話をしてくれてありがたかったです。女の子もあんまりしゃべれなかった子もいたけど一緒に過ごせて楽しかった。スタッフの人も高校3年生にもなった自分を色々とめんどろ見てくれてありがとうございました。

今回ベトナムに行けて本当によかったです。全ての人にありがとうを言いたいです。みなさんありがとう!! そしてベトナム万歳!!

ベトナムの家族

～触れ合った人々～

鹿屋女子高等学校 1年 壺岐 まい

7月23日、ホームステイでの生活が始まる。最初、ベトナムに行く前の印象は良いものではなかった。事前研修の時の説明で、私はベトナムに行く気力がなくなってしまった。自分はベトナムで生活をしていけるのだろうか？ホームステイの家族と仲良くしていけるのだろうか？そんな不安でいっぱいだった。バスで移動している時間がずっと続けばいいと思った。現地に着いた時もう不安で頭がいっぱいだった。だが笑顔をたやさず、みんなと普通に話をしていた。心の中では不安と期待がよぎった。ホストファミリーとの対面式。私はどうすればいいのかわからなかった。何も話さずにうつむいていた。自分は誰とでも話せる性格だが、初めての人の前ではとても緊張して話せなくなる。不安だらけの中、対面式は始まった。私は、私の家族はどの人だろう？よい人たちだろうか？と考えていた。いよいよホストファミリーの発表だ。自分の名前が呼ばれた。見た感じは良い人そうだ。友達のホストファミリーの人と親戚らしい。少し不安がなくなった。バイクで家につれていかれた。大きい家だった。おばあちゃんがこっちを見ている。わたしはお父さんにこの人は誰と用語辞典をひらいて聞いてみた。お父さんのお母さんらしい。次は28歳の息子そしてお母さんという順番にあいさつした。すごく良い人達でホッとした。部屋が用意されていた。とっても良い部屋だった。お父さんが用語辞典でいろいろ聞いてきた。いろいろ質



本人：左

問われて、答えに困ったりしたけど、ジェスチャーで辞典を使ってできるかぎり答えた。これで、言葉の壁が乗りこえられた。

朝になった。お父さんが朝ご飯を食べに行こうと言ったらしいが自分はその意味がわからず適当に、「OK！OK！」と言ってしまった。その後、恐怖のフォーを食べるとも知らず、店に連れて行かれて「はっ!？」と気づいた。朝ご飯を食べに行こうと言われたことに！しかもフォーを!!朝、山盛り一杯のフォーを食べさせられ吐き気がした。せっかくもてなしてくれているのだからと全部必死で食べた。次からは断ろうと単語を調べたりした。ある日の夜、お母さんがネイルサロンに行こうと言ったので、店でやってもらうことにした。綺麗なつけ爪がいっぱい並んでいた。1つ選べと言われたので、1つ選んで塗ってもらうことにした。お母さんのもてなしがうれしかった。また一つ不安がなくなった。



ホストファミリーの子ども

隣の人にも随分お世話になった。隣に一緒に来た団員がいたせいか、その家によく遊びに行くようになり、夜の散歩に連れていってくれたりした。とても良い人たちだった。

ベトナムは、最初の印象とはまったく違っていい所だったし、ずっとここにいたいと思った。最後の日には、ベトナムで一生すごせたら幸せなのにと考えていた。ベトナムに来て良かったと心から思った。

あたたかいベトナムの人達に会えてとても良かったと思えた4日間だった。

最後にベトナムの人々に「ありがとう」。

ベトナムで赤く燃えた

(財)鹿児島県国際交流協会 専務理事
団長 西村 良二

- 1 ベトナムは本当に「赤」く輝いていた
 - 国旗は、中心に黄色の星形がある以外は「真赤」である。
 - 地震が無いので建物は「赤」レンガ造りが多い。
 - 「赤」く燃える太陽は容赦なく熱い光線を降り注ぐ。
 - 中国の雲南省を源とし、ハノイ市内を流れる大河は「紅（ホン）河」と呼ばれ、その川幅に圧倒される。
 - 団員は終始笑顔絶やさず、時には真摯な態度で、時にはユーモアを交えて人々と交流し、日々に逞しさを増し、その顔はベトナムの空に「赤」く輝いていた。

2 団員の奮闘

団員の中には、将来JOCV（青年海外協力隊）や国連など国際舞台で活躍したいと明確な目標を持っている人も居た。さすがに皆選抜されただけあって性格は明るく、余り物怖じせず意見発表の態度もしっかりしている。2回の事前研修を経たせいか、お互いに気心も知れリラックスした様子。JICAベトナム事務所でJOCVの説明等を聴き、いよいよJOCVの活動する現地視察へ向かう。3箇所訪問したが、その中で村落開発普及員の森田隊員の活動を取り上げる。村落にある池に生活排水等が流れ込み水質汚濁が著しい。「環境」はベトナムの重点課題とか。森田隊員から作業手順を聞き、まずEMという有機物入りの団子を皆で丸めていけに投げ入れる。一面池が藻で覆われており日光を当てて投げ入れた団子を活性化させるためもの除去作業にはいる。それには、レンガを巻き付けてあるロープを投げ入れて藻に絡ませて引き上げる必要がある。力仕事でここは男性団員に頼るしかない。経験したことのない暑さだ。いつの間にか近所の村人も作業に加わり池の端が人で溢れそう。2時間程度であったが、猛暑の中へとへとになりながら村人と共同で実際の活動に従事したことは、まさに国際協力の一端に触れることができ、団員にとって忘れ得ぬ貴重な体験になったと思う。最後に、森田隊員の「1人でつらいことも多く、正直辞めたいと思ったこともあるが、村人からの熱い期待が挫けそうな気持ちを奮い起こさせてく

れる。やっぱりこの仕事生きがいです。」と聞いてJOCVの心の原点を見た気がした。

今年4月から県国際交流協会に勤務しているが、今回は団長の当番であると赴任早々に知らされ、海外旅行の経験に乏しい身としては不安がよぎった。ベトナムと聞いて思い浮かぶのは、インドシナの火薬庫と言われる程ベトナム戦争をはじめ、多くの紛争があったことと、南部の都市ダラットと屋久島が舞台の邦画の名作「浮雲」ぐらいであった。しかしながら、さる方面から今度の同行者はベストメンバーであると小耳にはさみ意を強くした。前評判に違わず同行者の方々はホームステイ時の朝夕の見廻りや健康チェック、また的確な行動の指示等絶えず団員に対し献身の愛情をもって接し、お陰様で道中これと言ったトラブルもなく、何とか団長としての任を全う出来たのも彼等あってのことと心から感謝したい。また、当事業を陰で支えていただいた関係の皆様にお礼を申し上げます。

3 ベトナム ア ラ カルト

- 死因の第1位が交通事故で、約15,000人/年とのこと。バイクの多さに驚く。交差点の横断報道を渡るのもおかげさで無く命懸け。信号はあって無きがごとし。バイクは原則2人乗りだが、自分の子どもは定員外とみなされ何人乗っても良い。これも、ベトナム人の家族の絆が深いことの証左か。
- 時間にルーズである。ホテルに〇〇時に車の手配を頼むもなかなか来ない。いらいらして催促しても「そのうちに来ますから」と余り慌てる様子も無い。日本人が時間に厳格過ぎるのかも知れない。これも異文化理解の一つであろう。
- ホームステイは満足した様子。朝市で朝食を御馳走になったり、バイクでいろいろ所へ連れて行ってもらったり、また、食事は大盤振舞だった。ディン・バン村を出発する朝は皆別れが辛そう。村人は親切で心優しい人たちだった。



本人：左

ベトナムが贈るとびきりの異文化体験

青年海外協力隊ベトナムOG 山下 美穂

この事業に同行するのは、今回が2度目。それも訪問国は前回と同じベトナム、2000年に私が青年海外協力隊員として活動した国でした。

今までの経験を生かせばなんとかなるだろうと思っていたのですが、2年ぶりのベトナムは、相変わらず暑く、熱い国でした。

今回の同行における私の役割は、前回の経験とちょっとベトナム語が喋られるからということも手伝って、様々な調整役でした。



本人：一番左

今までの日常生活でベトナム語を聞いたことのない団員から見れば、私は「ベトナム語ができる人」に見えたかもしれませんが、私のベトナム語は実はたいしたことはありません。本来の役割である調整役は、帰国した今でも実際いったい何を調整したのか記憶に無いくらいで、照りつける太陽の下、自転車で家庭訪問してただけだったように思います。

そんな頼りない調整のもと、団員達は異文化を理解するに百聞は一見に如かずで、体験を重ねて行きました。想像とのギャップが大きいほど目から大きなうろこやたくさんのおろこが落ちると思われる中、今まで食べたことが無いくらいご飯をおかわりするはめに

なったり、今まで食べたことが無い物を食べたり、今まで無いくらい一つのことを伝えるのに時間をかけたりして、経験を重ねて行きました。

どんな大きさの、または何枚のうろこをベトナムに落としてきたのでしょうか？

そして私の大好きなベトナムは今、団員のみなさんにどのように映っているのでしょうか？行く前に想像していた開発途上国のベトナムは今、全然違う印象を持つ熱い（暑い？）国として心に残っているのでしょうか。

協力隊員の活動視察では、実際に今活動している隊員の姿は団員にとっても眩しく映ったようです。短時間で活動をどう理解してもらえるか、隊員の方々の周到な準備もあったと思いますが、毎日「上手くいった」、「上手くいかなかった」と悩みつつ、一生懸命に自分の人生を「生きている」パワーが、団員の心に一緒に伝わってきて隊員活動を心で理解していたのかもしれないと感じています。

活動を終え帰国して5年、ベトナムを以前より客観的に気楽に見られるようになりました。そして、やっぱり大好きな国だと思いました。

帰国してもなお大きな存在としてベトナムは私の中に存在しています。過去の自分を振り返り、活動時の自分はどのように果たして輝いていたのか？あの頃の自分を見たくくなりました。

今回の体験事業を通して得た経験が、団員の方々の将来の夢にどのように生かされていくのか、楽しみにしています！

Viet Nam

青年海外協力隊ベトナムOB 門野 誠

ベトナム北部のハノイ・ノイバイ空港の到着ゲートをくぐると蒸し暑く、じっとりとした汗が噴き出てきて、久しぶりにベトナムの地に帰ってきたなと感じました。約2年前、青年海外協力隊の一員として、ベトナムに赴任して1年くらい経った頃、今回の体験事業と同じように鹿児島県の青少年達がベトナムを訪問し、JICAベトナム事務所から「門野さん、鹿児島県から中・高生が来るので会いに行きませんか」と言われ、初めて鹿児島県青少年国際協力体験事業というものを知りました。鹿児島県の青少年達とベトナムの地で会ったとき、久しぶりの鹿児島弁を聞き、懐かしく思ったのが、ついこの前のようで、そのときも青少年達が2回の事前研修を行なってベトナム語を覚えてきたと聞き、青少年達が話すベトナム語が非常に上手で、ただ驚くばかりでした。青少年の吸収力はすごいものだと思ったのと海外で鹿児島弁を聞いて嬉しく思い、故郷を思い出したのを覚えています。

それから、約2年が経ち、今回は同行者という事で、事前研修から参加させていただくことになり、久しぶりのベトナムに行けるということもあり、楽しく参加させていただきました。

今回の同行に参加して、傍で団員を見ていて、各団員のバイタリティ、適応力、吸収力等は目をみはるものがありました。第1回目の事前研修からのベトナム語の習得の早さ、日本でのあたり前が海外ではあたり前でない現実、価値観の違いにとまどいを感じ、考え直したりしながら過ごした約1週間のベトナム滞在、日本に帰ってきてから感じとったものを報告した報告会までがあったという間であり、皆が目を輝かせながら抱負や夢を語ってくれたのが、印象的であり将来が非常に楽しみになりました。

報告会が南さつま市で開催された日の夜に花火大会が鹿児島市で開催され観に行きましたが、花火を見つめながら、夏の終わりを感じ、今年の夏はとても充実していたと感慨深い気持ちになりました。今回の体験事業に同行したことによって自分自身もいい刺激をいただき、色々な勉強をさせていただいたと思います。皆さん同様、忘れられない思い出となりました。

そして、このような貴重な体験が出来る事業である



本人：一番左

体験事業に、今後も多くの青少年が夢や希望を抱き異文化理解の第一歩として参加していってもらいたいと思いました。

最後になりましたが、団員の皆さんが夢に向かって、今後ますますのご活躍を期待すると共にこの事業を支えてくださっている関係各位に感謝をしたいと思いません。

自分を見つめなおす旅

青年海外協力隊ニジェールOG 真茅 貴子

今回、この事業に「スケジュール管理・先生及び叱り役？」として同行することになり、光栄に思うと同時にいくらかの不安を覚えたのも事実である。なかでも、協力隊OBとはいえアフリカ隊員だった私には、ベトナムに関する知識がほとんどないということが一番大きかった。しかし、そこは子どもたちと一緒に0から学べるということで気持ちを切り替え、そして何より、大好きな子どもたちの成長を見届けられることができるという楽しみが、不安よりも勝っていたように思う。

2回の事前研修での団員の印象は、「やや大人しい、けれど聞く姿勢ができています」であった。大人でさえ気持ちが浮き足立ってしまう海外で、引率者の言うことをしっかり聞くことができるということは、健康管理と同じくらい大切なことである。これで不安要素が一つ減った。大人しいという部分が1週間でどんな風に変わっていくのか、しっかりと目に焼き付けたいと思った。

ディンバン村は想像していたよりも大きく、また路地が複雑であったため、団員のステイ先の場所を把握するのにかなり時間がかかってしまった。ほとんどの団員が対面式で不安そうな顔を浮かべていたため、私としては早く会いにいった様子を見て安心させたい（自分たちも安心したい）となかば焦りながら家々をまわったのだが、実際に訪ねてみると「大丈夫で一す」「ご飯おいしいです！」といった意外に明るい返事。片手に指差し会話帳を持ちながら、どうやら覚悟を決めた様子の団員たちに一安心した。

ホストファミリーとの交流を通じて、黙っていても始まらない、自分から質問したり行動したりすることが大切だということを学んだようである。

青年海外協力隊の活動現場の視察では、現地の人々と一緒になって堂々と活動する隊員を目の当たりにし、多くの団員が強く影響を受けていた。積極的に施設の子どもたちと交流し、汚れることも気にせず池の清掃作業に参加する姿を見て、机上の学習だけでは学ぶことのできない実体験の大切さを改めて感じる事となった。

そしてベトナムの子どもたちとの交流。約3時間半

の短い時間に学校の見学・意見交換会・ベトナムの紹介・日本のクイズ・出し物等と盛りだくさんの交流会であったが、どの団員も、そしてベトナムの子どもたちも楽しそうに活動していた。一人ひとりの表情がとても豊かになっていることを嬉しく思った。

文章にしてしまうとあっという間の1週間であるが、文化の違い・言葉の壁・健康管理など多くのことを、子どもたちなりに乗り越えながら、またそれらを上手に楽しんでいただいているように思える。

帰国後の表敬訪問である団員が言った「日本のことを聞かれて、うまく答えることができずに悔しかった。日本のことをもっと勉強しようと思った」という言葉にはっとした。自分自身が協力隊に参加しているときにいつも感じていたことだったから。私が2年間かけて感じたことを団員たちは1週間で体験したのだ、とうらやましくもあり、これからの子どもたちの活躍にいつそ期待がふくらんだ。進路選択もおおいに悩んでほしい。悩む中に今回体験した様々な思いが、きっと生かされてくるのだから。



本人：一番左

若者に期待します！

青年海外協力隊インドネシアOG 奥村 佳子

事前研修での子供たちの印象は、「反応が薄いかな？」「笑わない子が多いな……」と思っていました。ベトナム語学習や発表の時も、子供たちがどう思っているのか、何を考えているのか興味がありました。しかし、耳を澄まして聞いたり、時には近くに行き表情を見ながらでないと、なかなか分かりづらいこともありました。おそらく、緊張、恥ずかしさ、期待、不安が混ざった複雑な状況だったのでしょう。また、それがもう一步はじてほしい、一線を越えられない何かのように思えました。

ところが、韓国の空港に着いたときから、少しずつ様子が変わりました。空港にいる韓国人スタッフや各国の旅行者、韓国語や英語の文字、アナウンス。テンションは上がり、それと同時に、子供たちの個性がチラチラ見えてきました。感じたことをそのまま口に出し、興味のあることには目がキラキラしていました。人間本当に驚いたり、興味があるものには、目がくりくり丸くなるもんだなと知りました。子供たちのその様子を見ているのが面白かったです。

村に到着し、皆こわばった表情のままホームステイの家族宅へ旅立って行きました。その後姿に心配もありました。しかし、見回りながら見る子供達は、ニコニコしている子が多かったです。家族や、周りの子供に囲まれて、てんやわんやしながらも指差し会話帳を手を話している子。家族と手をつないで散歩をしたり、ひょっこり村に溶け込んでいました。協力隊員の活動場所では、炎天下の中、きつい労働をしながらも、楽しんでいました。また、この時期、自分たちも疲れているだろうに、他の団員を気にかけたり、同行者の大人たちにも気を使ってくれたり、子供たちのやさしさが見えてきたときでもありました。

旅の合間に、何人かの子とゆっくり話ができました。学校のこと、興味のあること、その子の考えがゆっくり聞いて面白かったです。他の子とも、ひとり10分づつでもゆっくり話して考えを聞いてみたかったです。

今回、健康管理で、「脱水予防」と、可愛い娘たちの防犯面を勝手に警戒していた私は、空港に帰ってきたときは、本当にホッとしました。ひよろひよろに



本人：右

なっていた大人たちと違って、体力も限界であろう子供たちが解団式でしっかりと立って挨拶を述べていた姿に、若さと逞しさを感じました。

この一週間で子供たちは、色んな表情を見せてくれました。私が思う以上に色んなことを吸収したと思います。子供たちには、本当に親切だった村の人々と、ぜひ連絡を取り合ってもらいたいです。また、吸収したことが生きても生きなくても、子供たちには自分の納得のいった将来、進路を選択してもらいたいです。子供たちみんなの今後を楽しみにしています。

国際協力体験事業ノススメ

KTS鹿児島放送霧島支局長 徳永 健一

ベトナムは、熱かった。いたるところから発展のエネルギーが発せられ、住む人々も、空気ですえも躍動的に感じられた。

それを五感で味わうことができたことは、参加した子どもたちばかりでなく、私自身にとっても大きな収穫だった。

子どもたちにとって、ディンバン村の人々の屈託のない笑顔や協力隊員の光る汗は、脳裏に焼きついて離れないだろうし、常に体にまとわりつく東南アジア特有の空気や街の雑踏、作業をしたバクザン省の池の臭いも、言葉で再現するのは難しいが、肌や耳の記憶としてはすぐに思い出すことができるものとなっただろう。

これらの体感の記憶をもたらしたのは、県青少年国際協力体験事業の過去15回の経験の蓄積ではないだろうか。私自身は初めての同行取材だが、少なくとも16回目となる今回は、体験プログラムとして洗練されたものだった。

プログラムには、青年海外協力隊の活動体験と現地の生活体験の2つを軸に、様々な体験が盛り込まれた。

事前研修で行った学習も効果的に子どもたちの活動をサポートした。

たとえば、事前に得た「ベトナムの生活はのんびりとしている」という情報は、実際に体験してみると、家族との食事や友人との語らいの時間を確保し、大切にしていることだと気づく。決してルーズなだけではないとも気づく。



本人：左から二番目

「協力隊員は、現地の人々と環境問題などの諸問題に取り組んでいる」という情報は、実際の現場に行ってみると、隊員は共に笑い汗を流し、現地の人々と同じ目線であることに気づく。決して、途上国に対して優越などしていないとも気づく。

子どもたちは、体験を通して本物の知識を獲得できた。

日程では、詰め込んだスケジュールの日もあり、ステイ先で終日過ごす日もありと、体験を重視した配慮が現れていた。事前の調整がいかに大変なものだったかがうかがえた。

欲張りをいえば、ベトナム戦争の戦跡見学を日程の中に加えられなかったかということ。戦争を学ぶということは、その国の歴史や現状、その国と世界との関わりを知るために有効だ。これは、ベトナムに限らず、アジア諸国に共通する。



一連の取材の様子は、特集企画として、KTSの夕方の報道番組「KTSスーパーニュース」で8月6日から8日までの3日連続で放送させてもらった。

事業の様子を追いながら、ベトナムの現状や課題を紹介することができ、特に、子どもたちの素顔やベトナムのありのままの姿をとらえたことは、記者冥利についた。

あらためて子どもたちや同行スタッフ、ベトナムの人々、実行委スタッフなどの関係者に深く感謝したい。

協力隊員の生き生きとした姿を見て、「隊員になりたい」「こんな大人になりたい」と話す子どもたちを見て嬉しくなった。そう遠くない将来、素敵な大人になると確信する。

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の概要

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

1 趣 旨

鹿児島県の青少年を開発途上国に派遣し、その国づくりに貢献している青年海外協力隊員の活動現場の体験や現地での協力活動を行うことで、国際協力に対する理解を深めるとともにホームステイや学校、施設などでの交流を通して相互理解を深め、国際性豊かな人材を育成する。

また、派遣後は、これらの体験を報告会などを通して学校や地元に戻元し地域レベルでの国際化に寄与するものとする。

2 事業主体

主催：「鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会」

※構成団体：青年海外協力隊鹿児島県OB会

鹿児島県青年海外協力隊を支援する会

(財)鹿児島県国際交流協会

共催：鹿児島県内の関係市町村

後援：独立行政法人国際協力機構九州国際センター、鹿児島県、鹿児島県教育委員会

協賛：鹿児島県内の企業

3 派遣先

派遣国はアジア諸国を対象とする（実績は別紙参照）

4 派遣者

参加者：県内各地から募集・選考した10～20名の中学生、高校生、専門学校生

同行者：実行委員会関係者と新聞社、テレビ局など報道関係者

共催市町村職員

5 実施時期

7月下旬～8月上旬の間の1週間程度

派遣の前後に事前研修会、報告会なども実施

6 経 費

この事業の実施に要する経費は、実行委員会の構成団体、協賛企業、共催者（参加者に対する助成金による方法を含む）及び参加者が負担する。

鹿児島県青少年国際協力体験事業の実績

回	派遣国(地域)	派遣期間	人数 (生徒数)	参加者の出身市町村・共催市町村	備考
第1回	マレーシア (コタキナバル, サリマンドゥ)	平成3年 3/27(水)～4/3(水) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市, 阿久根市, 名瀬市, 市来町, 伊集院町, 祁答院町, 内之浦町, 佐多町	公募
第2回	マレーシア (スブランペラ)	平成4年 3/27(金)～4/3(金) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市, 鹿屋市, 大口市, 指宿市, 隼人町	公募
第3回	マレーシア (クチン, テラガアイール)	平成5年 7/23(金)～7/30(金) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市, 加世田市, 三島村, 隼人町, 志布志町, 高山町	公募
第4回	インドネシア (バンドン, パシールカリキ)	平成6年 8/1(月)～8/7(日) (6泊7日)	15名 (9)	鹿児島市, 出水市, 指宿市, 垂水市, 菱刈町, 霧島町	公募
第5回	マレーシア (コタバル)	平成7年 7/30(日)～8/6(日) (7泊8日)	16名 (10)	鹿児島市, 国分市, 頴娃町, 宮之城町, 隼人町, 吾平町, 根占町, 中種子町	公募
第6回	マレーシア (タイピン, パリットムントリー)	平成9年 7/27(日)～8/3(日) (7泊8日)	16名 (11)	鹿児島市, 串木野市, 東市来町, 伊集院町, 郡山町, 日吉町, 吹上町, 金峰町	市町村 推薦
第7回	マレーシア (クチン, テラガアイール)	平成10年 7/26(日)～8/2(日) (7泊8日)	25名 (20)	鹿児島市, 大口市, 国分市, 菱刈町, 始良町, 蒲生町, 溝辺町, 横川町, 栗野町, 吉松町, 牧園町, 隼人町, 福山町	市町村 推薦
第8回	タイ (アユタヤ, ルンカーオ)	平成11年 7/30(金)～8/5(木) (6泊7日)	14名 (9)	鹿児島市, 指宿市, 加世田市, 喜入町, 笠沙町, 知覧町	市町村 推薦
第9回	タイ (チェンマイ, メーカンボン)	平成12年 7/24(日)～7/31(月) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市, 鹿屋市, 国分市, 垂水市, 祁答院町, 財部町, 未吉町, 串良町	市町村 推薦
第10回	ベトナム (ホーチミン, フーホイ)	平成13年 7/20(金)～7/26(木) (6泊7日)	19名 (13)	鹿児島市, 出水市, 加世田市, 国分市, 垂水市, 祁答院町, 溝辺町	市町村 推薦
第11回	ベトナム (ホーチミン, タンビン)	平成14年 8/4(金)～8/10(木) (6泊7日)	17名 (11)	鹿児島市, 串木野市, 枕崎市, 国分市, 垂水市, 溝辺町	市町村 推薦
第12回	タイ (ナコンラチャシマー県を 予定していた)	平成15年 SARS及び鳥インフルエ ンザの影響により中止			市町村推薦 予定
第13回	マレーシア (クアラルンプール, マラッカ市, トレンガヌ州)	平成16年 7/19(月)～7/26(月) (7泊8日)	13名 (9)	鹿児島市, 枕崎市, 国分市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第14回	ベトナム (ハノイ, ホアビン省, モーハイ村)	平成17年 7/24(日)～7/31(日) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市, 枕崎市, 串木野市国際 交流協会, 国分市国際交流協会, 知覧町, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第15回	マレーシア (クアラルンプール, マラッカ市, サバ州)	平成18年 7/22(土)～7/29(土) (7泊8日)	18名 (12)	鹿児島市, 枕崎市, 霧島市, 知覧町, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦

VIETNAM



= 編集・発行 =

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会
〒892-0816

鹿児島県鹿児島市山下町14-50 かごしま県民交流センター1階
(財)鹿児島県国際交流協会内

TEL:099-221-6620 FAX:099-221-6643

吹き出し：叶 朝子（与論高等学校2年）